

2.1 コメンテーター 1



大門高子
(東京紫金草合唱団)

合唱朗読構成 「紫金草物語」

紫金草合唱団 合唱朗読構成「紫金草物語」～不忘歴史 面向未来～より抜粋
作詞 大門高子 作曲 大西進 編曲 山下和子・張勇
紫金草とは花だいこん、諸葛菜、紫花菜などと呼ばれている紫色の美しい野の花です。この花は、日中戦争当時、南京郊外紫金山の麓から日本に持ち帰り鎮魂と平和を願って巻き広めてきた花です。この花の由来を絵本「むらさき花だいこん」と合唱曲にしました。この歌を中心に歌う合唱団が大阪・奈良・金沢・東京・府中・千葉・宮城・茨城などにあり活動しています。団員は主婦・教師・保母・退職者などのアマチュア。この10年に数百回の国内公演、7回の訪中公演（南京・北京・上海）に取り組み、中国では市民や大学生と一緒に演奏会や交流を続けています。



今、お聞きいただいた「紫金草物語」を作詩しました大門と申します。演奏は如何だったでしょうか。初めて南京で演奏した時は、南京の人たちにはこんなものでは赦されないだろう、最初に土下座をしてからでないと歌えないんじゃない

ないかとか、石や卵を投げられるんじゃないだろうとか心配して演奏したことを思い出します。そのあたりについては後程お話ししたいと思います。

まず最初に、先程3人の先生方から提案されたお話について感想を述べたいと思います。先ずこのような研究が大学で市民と一緒に取り組まれるということは大変貴重に思います。私達のような市民活動に対しても、研究の先生方から助言いただけたらと思います。紫金草合唱団の仲間たちは立命館大学の研究体制、平和ミュージアムホールの活動などにも大変関心を持っておりますので、今回の演奏の取り組みに呼び掛けましたら全国から73名が参加いたしました。

南京についてお話ししたいと思います。昨年度は世界中で南京についての映画が4本作られました。でも日本国内では全く上映される機会がありません。その中でたった一つだけ「南京！南京！」という映画を見る機会がありました。私もまいりましたが大変いい映画でした。たった2回しかやらないという映画会なので満員で入れないかと思って行きましたが、入口には機動隊が入口を固めていましたが、二回とも満員といった状況ではありませんでした。北京から駆けつけていた陸監督も日本で上映する機会をこれから作ってほしいと話されていました。機会があれば是非取り組んでいただけるといいなと思います。

日本国内では南京についてそういう状況がありますが、中学で最近授業をしたことをお話ししたいと思います。一週間ほど前、ある中学一年生6クラスにこの紫金草物語の絵本『むらさき花だいこん』、南京をテーマにした授業をしました。この授業を計画したのは退職前の男の先生ですが、この十数年、中学の一年生を担当するといつもこの『むらさき花だいこん』の絵本を使った授業で中学に入ったばかりの一年生を迎えることになってきたそうです。先生が絵本を読んで（時には花だいこんの花畑の中で）、それから「平和の花紫金草」の歌を歌ってあげるそうです。これまでそんな先生に出会ったことはないで、始めに生徒の心をつかんでしまっていると思います。そのあとを受けて私は、絵本を書いた思いや合唱団の活動や中国の人たちの反応について話をするのです。授業には父母や校長先生や他の先生方も入れ替わりながら見に来ていましたが、今の日本の教育界でこんな授業も可能なのは驚きです。

今年ショックだったのは、中学生が中国に対してどんな感じを持っているかなと聞いたところ6クラス殆ど全員が「大嫌い」。なぜかと聞くと「パクリ、

嘘をつく、怒鳴る、暴れる、人のものを盗む、中国人大嫌い」という感じなんですね。どうしてそう思うのか聞くと、みんなテレビで見たとか家の人が話しているとかいうのです。多分にマスコミの取り上げ方にも問題があると思います。そこで私たちが、中国で草の根交流で出会った中国の人たちのことを話すと、みんなびっくりするのです。一人だけ中国の人は優しいんだよと言った人がいましたけれども、大変怖いことだと思いました。戦前支那とかチャンコロとか差別してきたそういう流れと同じ雰囲気を感じました。

人間同志の交流や理解がこれからとても大事だと思います。だからこそ、人間をどう見るか心に関わるこういう生き方の問題、根源の問題としての表現活動、そして文化活動として交流することはとても大切だと思います。今日お話いただいたような村本先生やボルカス先生、張先生が取り組まれている研究を続けることは、今の日本の中では貴重な研究だということを実感いたしました。聴いていただいた合唱曲は、時間の関係で抜粋にして9曲を歌ったので、うまくつないだかどうかわかりませんが全曲ではありません。

演奏会に右翼の街宣車が来たことがあります。こうした風潮の中でも、合唱という誰でも参加できるアートの市民活動として、おおらかに戦争は嫌だ、殺されるのも殺すのも嫌だという姿勢で活動が続けていきたいと思っています。

レジュメに書かせていただいた紫金草合唱団の取り組みを写真で紹介しながらお話させていただこうと思います。私は生後10日で栃木県の宇都宮で空襲を受けて、その中を母親に抱かれて逃げて助かったという年齢です。そしてこの「紫金草物語」に取り組むきっかけになったことは、小学校の教師をしまして、「先生、怖い話をしてくれ」と言われるんですね、子どもの頃の話をしてあげたとき「先生、その時恐竜生きていた？」と言われました。「恐竜は生きていなかったけれども、怖かったのは戦争という恐竜」と話しました。

私はそれまで原爆や空襲の被害のことをたくさん語り聞かせていました。でも、その前に加害があったことを子ども達に語り伝えなければならないと思っていました。私自身考えなければと思った時にこの花に出会いました（植物学ではオオアラセイトウ）。この大学の周辺でも見つけることができると思いますが、日本国内いたるところで見つけられる美しい野の花です。

この花は江戸時代に一部伝えられたという話もありますが、今のように広がるきっかけとなったのは紫金山と名づけてまき広めてきた兵士がいたということ、30年近く前に新聞のコラムで知りました。紫金山の麓に咲いていたのを日中戦争の間に持って帰ってきたということでした。その後の取材で様々なことがわかりました。諸葛菜、むらさき花だいこん、紫金山などと呼ばれていますが、この花が好きだと言う方が多いと思います。見たことないと言う方、いらっしゃいますか？ 気づかないだけで、周りを見れば、美しく咲いている花を見つけられるのではないかなと思います。是非探してみてください。ちょっと時間の関係で飛ばします。慌ただしくて申し訳ありません。

これが南京虐殺記念館です。そして今お話しているのが、幸存者の夏淑琴さんと李秀英さんです。夏淑琴さんのお話は先ほどもたくさんでございましたが、「泣いて泣いて目が悪くなった」という話がとても印象的だったので、歌の中でも村の広場でというところで歌にしました。大変優しい素敵な方です。これは第1回目公演の時に制作した小さな花壇ですが、今は花園ももっと広くなり大きな平和の塔というところの下には紫金山の少女像が立っています、この写真は10年前の写真です。第一次の公演の時には先ほどお話したように、土下座してからでないか歌えないんじゃないかとか、大変な緊張で歌いました。

これが第三次南京公演ですが、いつも中国の方たちは大きな懐で私達を迎えてくれまして、最初は演奏の途中で出ていってしまうんじゃないかということも思ったりして心配しましたが、途中で出ていくどころか、ずっとしっかりと聞いてくださって、そのうちに会場でハンカチが動くのが舞台の上から見えるんですね。舞台上で歌っている人たちにも色んな思いがご自分のお父さんの写真を胸に、戦場のことを想い出してか狂い死にしていたという方の写真を胸に歌っていらっしゃる方とか、いろんな思いがあって歌っているものですから、涙が出てたまらない、そんな状況の中でお互いを感じるものがある、そして演奏が終わった後には、政府の方たちが大成功だったね、南京の人たちはあなたたちを大きな懐で大歓迎したよと言ってくださったことがありました。南京虐殺記念館にいらしたことがない方は是非いらしていただきたいと思います。新しくリニューアルされていますので、歴史の事実をしっかり振り返ることがとても大切だと思います。

私どもはいつも訪中公演をした時は、行った時必ず市民と交流することを大事にしてきました。私たちはプロではなくアマチュアです。精いっぱい演奏しますが、アマチュアとしての心を大事にした取り組みをすべきだと思っています。舞台の上で演奏をするだけではなくて、その後皆さんの感想を聞いたり、質問を受けたりします。若い人たちと交流したり、市民の方たちと交流します。アートでということ、今回はテーマになっていますけれども、歌の力というものに本当にいろんな意味で、役割を果たすものだと思ってきました。音楽はとても人の心に働きかけることができるのだという実感でした。

ナチの時には音楽が利用されたということもあって、気を付けていかなければいけないという面もあると思いますが、音楽の力で理屈ではない感情で気持ちを通じ合えたという面もあったかと思います。中国ではコンサートにも取り組みますが、朝の散歩とか、公園に行った時とか、ハイキングをしながらとか、色んな形で南京の人たちと交流をしております。そうしますと、行く前には中国はあまり好きじゃないと言う人とか、南京は怖いからちょっと行きたくないという人も、皆、中国や南京が好きになって、帰ってくるときには、皆いい人になって帰ってくるというような、そんな紫金草語録で笑いあうこともあります。例えば「寝たきり婆さんになるより出たきり婆さんになろうよ」と、元氣にがんばって出かけてみたり、「行かな損する」、行くと必ず得をするといいながら励まし合って活動を続けております。

南京事件を皆のものにする、というのはなかなか難しい状況にありますけれども、人間として戦争は嫌だ、殺されたくない、殺したくないという当たり前の感覚。その当たり前のことを、思想信条を越えて、誰でも参加できる市民活動の歌として、歌は本当に誰でも参加できます。音痴だと思っている人も皆で支えながら、私は声が出ればと思ったんですが、声が出なくても歌えるという、一番最初に行った時には車いすで体から絞り出すようにして歌っている人がいました。その人が非常に南京の人たちを感動させました。これからも市民活動の場として、今日歌ったメンバーには誰ひとりとしてプロはいません。皆、アマチュアで年金暮らしだったり、働きながら一生懸命時間を作ったりということで、全盲の方もボランティアの方が一緒についてきて参加していますが、本当にいろんな人がこの歌に思いを寄せて参加しています。

帰国後全国各地で、紫金草合唱団を作ろうということで、現在も、広島、大阪、奈良、金沢、千葉、茨城、東京、府中、宮城などで、合唱団で歌い続けています。各地で5人10人、100人200人で歌い練習していますが、時々全国各地で集まって大きなコンサートをやってきました。そして、この十年間に7回の訪中公演に取り組みました。第一次の時には200人で行きました。「戦争は嫌、歌が好き、花が好き、平和が好き、人間が好き」ということは誰でも共有できるそんなことじゃないかなという風に思っております。

今回このシンポジウムに参加するきっかけになりましたのは、北大の小田先生にご紹介いただいたものです、小田先生お立ちください。ありがとうございます。北海道大学の小田先生には、撫順でお会いしました。ご存知ない方もいるかと思いますが、そこで撫順戦犯管理所のリニューアル式典の時にお会いしました。管理所というのは、シベリアで抑留された60万人のうち1000人が戦犯として収容され、6年の間に、赦し、認罪し和解した奇蹟的な取り組みをしたものです。

小田先生にお会いした時、紫金草合唱団は中国では清華大学とか南京大学、南京理工大学とかで演奏していますけれども、是非日本の若者にも聴いてもらいたいと話した所是非にということで1月にやらせていただいて、学生さんたちに聞いてもらいました。

とても素直に聴いてくれ素晴らしい感想文を書かせてくださって、読む私たちも大変感動しました。まだまだ話したいことはいっぱいあるのですが時間の関係もありそろそろ終わりにしたいと思います。南京の張先生に多分咲いていてごらんになっているかと思いますが、朝採ってきた紫金草をお渡ししたいと思います。南京へ思いをということです。どうもありがとうございました。

大門高子（東京紫金草合唱団）

地域の歴史や環境、平和をテーマに合唱組曲やミュージカル、絵本などを創作、集いや音楽会等を企画演出。合唱組曲は「大きな樹」「未来への選択」「桜とハナミズキ」「再生の大地」等20本。日本演劇教育連盟全国委員。元小学校教師。